

日本におけるメディア・スポーツ研究のパーспек ティブ

大橋, 充典
久留米大学人間健康学部

西村, 秀樹
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2560362>

出版情報：健康科学. 42, pp.47-55, 2020-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

日本におけるメディア・スポーツ研究のパースペクティブ

大橋 充典^{1)*}, 西村 秀樹²⁾

A perspective of media sport research in Japan

Mitsunori OHHASHI^{1)*} and Hideki NISHIMURA²⁾

Abstract

The relationship between sport and mass media has been interdependent for a long time. Media, people and/or organizations with authority have given us bias to sport as to the portrayals of reality created by media in recent years. The purpose of the present study was to clarify trends of media sport research while reviewing the studies published from 2000 to 2019 in Japan. In the past two decades, although the number of papers of media sport in Japan has increased and changed the media environment on a worldwide scale, most media sport studies have focused not on the Internet but traditional media such as TV, newspapers and magazines. Also, this review showed that the subjects of media sport in Japan might be influenced by the popularity of sporting events. In other words, only a few studies about media sport which have not focused on major sport or events such as the Olympics were identified in previous studies. In the future, more studies which are not affected by the popularity of sport or events have to be accumulated. In addition, the relationship between sport and new media including the Internet which have a lot of connections with a vast number of people, will have to be researched to develop sport culture in Japan.

Key words: mass media, online media, sport culture, review

(Journal of Health Science, Kyushu University, 42: 47-55, 2020)

1 久留米大学人間健康学部, Faculty of Human Health, Kurume University, Japan.

2 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.

*連絡先: 久留米大学人間健康学部 〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635 Tel: 0942-43-4411

*Correspondence to: Faculty of Human Health, Kurume University, 1635 Mii-machi, Kurume, Fukuoka, 839-8502, Japan.
Tel: +81-942-43-4411 E-mail: ohhashi_mitsunori@kurume-u.ac.jp

問題の所在

本稿の目的は、日本におけるメディア・スポーツ研究のレビューをとおして、その動向および研究の到達点を明らかにし、関連研究における課題を析出することである。

これまでのメディア・スポーツ研究は、特に欧米を中心に蓄積されてきた。Kinkema and Harris¹⁾は1980年代までのメディア・スポーツ研究のレビューを行い、PRODUCTION OF MEDIATED SPORT, CONTENT OF MEDIATED SPORT, および AUDIENCE の3つのカテゴリーに分類している。この3つのカテゴリーは現在のメディア・スポーツ研究においても参考にされており、特に日本においてはメディア・メッセージの「送り手」、「内容」、および「受け手」のいずれかに位置づく形で研究が進められてきた。また、1990年代までのメディア・スポーツ研究のレビューを行った山本²⁾は、日本における関連学術誌^{註1)}に掲載された論文が6本のみであったことから、メディア・スポーツ研究の遅れを指摘している。

スポーツをメッセージとして送る側であるメディアは、それを報道する上で特権的な力を持ち、またメッセージを受け取る側である視聴者はそれを娯楽として消費する。スポーツの放送に関していえば、放映権料という形で多大な収入を得ることができる競技団体は、自らのスポーツの知名度やスポーツイベントを宣伝できるという意味で特別な権利を持つ。これまで、メディアとスポーツが互いの利益のために依存関係にあることはたびたび指摘されてきた³⁾が、昨今のメディア環境はこれまで研究が進められてきた社会的背景とは一致しない。たとえば、Wenner⁴⁾は、これまでのメディア・スポーツ研究の発展に関して、1975年から1989年までを幼年期 (Mediasport 1.0)、1990年から1998年までを青年期 (Mediasport 2.0)、1999年から2006年までを成人早期 (Mediasport 3.0)、そして2007年以降を中年期 (Mediasport 4.0) と区分している。特に、Mediasport 3.0 から Mediasport 4.0 の時期において、メディア・スポーツに関する研究課題が円熟したことによって、理論的枠組みや研究方法は多様化し、ゲーム

やブログといった新たなメディア環境の開拓を押し進めたという。特に1990年代後半から2000年代におけるメディア環境の変化は、それまでメディア・メッセージの「受け手」であった視聴者が、「送り手」として加わったことである。

ところで、先の Kinkema and Harris および山本が行なったレビューは、2000年以前のメディア・スポーツ研究に多大な貢献をもたらすものであるが、メディア・メッセージの「送り手」、「内容」、および「受け手」の3つカテゴリーを中心に検討されている。しかしながら、Wennerによるメディア・スポーツ研究に関する区分からも理解されるように、メディア環境が大きく変化することになった2000年頃から、北米を中心としたメディア・スポーツ研究の射程も広がることになる。つまり、メディア・メッセージの3つのカテゴリーだけではなく、新たな分析視角も必要だといえる。そこで本稿では、2000年以降の日本におけるメディア・スポーツ研究について、研究対象とされた「媒体」、「コンテンツ」、および「フレーム」を中心に整理することを第一の研究課題とし、その上で、今後のメディア・スポーツ研究における課題の提示を試みる。

分析対象の選定

研究の手続きについては、まず、J-Stageにて査読付きの学会誌^{註2)}に限定し、「メディア」および「スポーツ」をキーワードとして2000年以降に発表された論文を抽出した。次に、抽出されたものからメディアにおけるスポーツに焦点が当てられていることを基準として、本分析対象となる論文を選定した。上記の基準に合致し、最終的に分析の対象となった論文は29本であった。

2000年以降のメディア・スポーツ研究の動向

表1には、分析の対象となった論文を整理した結果が示されている。

分類されたそれぞれの項目に基づいて概観すると、まず「媒体」については、全29本の論文のうち、テレビあるいは新聞を対象としたものが半数以上を占め、その他にはラジオ、雑誌などが研究の対象とされていた。「コンテンツ」については、サッカーW杯や五輪な

どの世界規模の大会を取り上げたものが目立つものの、甲子園野球や九州一周駅伝、十二時間の長距離競争といった日本国内のスポーツイベントに注目した研究や、身体に表象されるイメージに関する研究なども散見される。また、研究対象とされた年代についても1900年代前半のものから、2010年代のものまで多岐にわたっていた。「フレーム」については、ナショナリズム、ジェンダー、ナラティブ、政治、イベント、コミュニティなど多様であった。以下では、研究の対象とされた「媒体」別に確認していく。

テレビ

文字通りテレビでの放映が前提となるため、研究対象は大規模なスポーツイベントに限定されていたといえる。

ファン⁵⁾は、日韓W杯に関するニュース番組を中心に分析を行い、日韓友好に関する言説について、ナショナリズムの点から明らかにしている。同じく、日韓W杯を分析対象にしている山本⁶⁾は、アナウンサーの視点から実況放送の内容について解説する。また、身体のジェンダー化について検討した田中⁷⁾は、シドニー五輪の開会式を分析の対象とし、身体パフォーマンスの表象に焦点を当てている。1964年の東京パラリンピックの映像に着目した崎田⁸⁾は、ニュースとそれ以外の番組に分類し、整理することで、当時のテレビプログラムに関する基礎的な資料を提示している。また水出⁹⁾は、東日本大震災との関係から、2020年の東京五輪・パラリンピックの招致決定を喜ぶ「われわれ」と、それを否定する「他者」との関係について、招致決定を報じたニュース、報道番組、またワイドショーを手掛かりに分析している。いずれの研究も、世界規模の大会を分析対象としており、ファンはテレビ番組に加えて、新聞および雑誌も分析対象とし、水出もテレビ番組に加えて、五輪招致委員会、笹川スポーツ財団、また新聞の世論調査結果を交えて検討している。

その他にも、米国におけるリオデジャネイロ五輪放送の実態について、NBCに対する批判記事や記者によるコメント等が分析から批判的に検討しているトンプソン¹⁰⁾の研究や、プレミアリーグやサッカーW杯の日本および海外の実況中継の比較によって、なにが批判

の対象として言説化される出来事なのか、また批判がどのように展開されていくのかについて、言語学的な視点から分析している多々良の研究¹¹⁾が本項目に該当する研究だといえるだろう。

新聞

新聞記事の分析を試みた研究については、世界規模のスポーツイベントだけではなく、日本国内のスポーツイベントや海外で開催されたスポーツ大会など、研究対象は多様であった。

山本¹²⁾は、2002年の九州一周駅伝に関する記事を対象に、九州一周駅伝をめぐる物語の構造について明らかにしている。また西原¹³⁾、松浪¹⁴⁾はいずれも、歴史的な視点から言説分析を試みている。西原は、明治末期から昭和初期までの甲子園野球に関する新聞記事を対象として、高校野球に見られる青年らしさや純真といった言説が生成されてきたことを明らかにしており、また松浪は、1901年に開催された十二時間の長距離競争に関して、メディア・イベントの形成過程と背景について検討している。

また浜田¹⁵⁾は、1932年のロサンゼルス五輪に関する新聞記事を分析することによって、メディアの果たす役割についてナショナリズムの点から明らかにしており、山田¹⁶⁾は、2020年の「東京五輪・パラリンピック」を対象に、東日本大震災と関連する記事を取り上げ、ジャーナリズム論から検討している。

宮澤¹⁷⁾と久保・杉本¹⁸⁾は、特定の種目に着目するのではなく、広くスポーツに関する言説に焦点を当てて分析する。宮澤は、1946年以降の新聞記事を対象に、スポーツにおける「負け」の語られ方について検討しており、また久保・杉本は、新聞記事の分析から、高校スポーツにおける教育とビジネスの関係について検討している。

多くの研究が、日本におけるメディアを分析の対象としている一方で、森津¹⁹⁾は、植民地化朝鮮におけるスポーツ大会の開催に焦点を当て、新聞記事の言説分析から大会へのメディアの関わりについて明らかにしている。

雑誌

雑誌が分析対象とされた研究では、テレビや新聞で

表1 学会誌に掲載されたメディア・スポーツ研究 (2000年-2019年)

著者	媒体	コンテンツ	フレーム
山口誠 (2003)	ラジオ、新聞、雑誌 1920年代前半-30年代後半「早慶戦」「甲子園野球」など	野球放送を聞く街頭ラジオの空間 ・大阪朝日新聞 ・雑誌「野球界」	オーディエンス
ファン・ソンビン (2003)	テレビ、新聞、雑誌 2002年「日韓サッカーW杯」	W杯報道における日韓女好きを語る言説 ・テレビ朝日「ニュース・ステーション」日本テレビ「ザ・ワイド」TBS「サンデージャポン」NHK「おはよう日本」「BSニュース」 ・産経新聞、朝日新聞、毎日新聞、スポーツ報知 ・雑誌「週刊サッカーマガジン」など	ナショナルリズム
田中東子 (2003)	テレビ 2000年「シドニー五輪・開会式」	五輪セレモニーとメディア化されたスポーツ ・NHK「シドニー五輪・開会式」	ジェンダー
黒田勇 (2003)	メディア一般 2002年「日韓サッカーW杯」 1964年「東京五輪」	東京オリンピックから日韓サッカーワールドカップまでのスポーツイベントの変化	メディア・イベント
山本浩 (2003)	テレビ 2002年「日韓サッカーW杯」	W杯におけるスポーツアンウンサーによる実況放送 ・総合テレビハイライト ・総合テレビ中継 ・ハイビジョン中継	実況中継
山本教人 (2005)	新聞 2002年「九州一周駅伝」	九州一周駅伝における「物語の構造」 ・西日本新聞	ナラティブ
松浪稔 (2007)	新聞 1901年「十二時間の長距離競争」	スポーツ・メディア・イベント形成の背景と実態 ・時事新報	メディア・イベント
阿部崇 (2008)	新聞 1951-1958年「ストック・マンデビル競技大会」	ストック・マンデビル競技大会の発展の過程 ・雑誌「The Cord」	スポーツマンシップ
山口誠 (2008)	ラジオ、新聞 1932年「ロサンゼルス五輪」	国際中継放送に関する新聞報道 ・実況放送 ・国際連盟中継 ・東京朝日新聞、読売新聞、東京日日新聞、大阪朝日新聞、朝新聞など	同時性
劉傑 (2009)	著書 2008年「北京五輪」	北京五輪における中国の政治、社会および文化への影響 ・著書「ノーと言える中国」「中国不高興」「中国公民社会発展青書」	ナショナルリズム
浜田幸絵 (2011)	新聞 1932年「ロサンゼルス五輪」	五輪における新聞報道の果たす役割 ・東京朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞	ナショナルリズム
森津千尋 (2011)	新聞 1920-1937年「京城日報」主催「スポーツ大会」	植民地化朝鮮におけるスポーツ大会開催へのメディアの関わり ・京城日報 ・東亜日報	政治
森田浩之 (2012)	メディア一般 2011年以降「スポーツ大会」	真日本大震災御のメディアスポーツに表れた「物語（ナラティブ）」 ・CM「AGジャパン」など ・朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞など ・NHK「ニュースウォッチ9」など	ナラティブ
内田雅克 (2012)	雑誌 戦中から戦後「野球」	戦時、敗戦、占領下における日本人男性のマスキュリニティの動態 ・雑誌「少年倶楽部」「野球少年」「痛快少年」「少年」「少年読売」「少年文庫」「少年の野球」「少年少女櫻」「少年少女ボール」「ベースボール・マガジン」など 「集英社の少年少女 おもしろブック」「ベースボール・マガジン」など	ジェンダー
西原茂樹 (2013)	新聞 明治末期から昭和初期「甲子園野球」	甲子園野球に関する「青年らしさ」言説および「純真」言説 ・大阪朝日新聞「社説」、東京朝日新聞 ・雑誌「野球界」「運動界」「運動世界」など	ナラティブ
小石原美保 (2014)	雑誌 1920-1930年代「スポーツ」	スポーツする十代の女性の言説、イメージの表象およびジェンダー規範 ・雑誌「少女倶楽部」	ジェンダー

和田崇 (2015)	インターネット 2013年「剣道」	インターネット上に構築されたサイバースペースにおけるマイナースポーツ ・ website「全日本剣道連盟」「剣道いちに壘」「剣道情報提供お願ひボード」(柳沢板)その他関連サイト	コミュニティ
藤田泰子 (2015)	ラジオ、報告書 1924年「シャモニー五輪」 1924年「パリ五輪」	ラジオ草創期における五輪放送と社会情勢 ・ 五輪大会公式文書など	放送メディア
崎田嘉寛 (2015)	テレビ 1964年「東京パラリンピック」	東京パラリンピック大会に関するテレビ放送 ・ NHK東京パラリンピック関連番組「ニュース」「ニュース以外の番組」	番組編成
山田樹太 (2015)	新聞 2020年「東京五輪」	東日本大震災と東京五輪報道の関係性 ・ 朝日新聞、読売新聞、東京新聞、福島民報、琉球新報 ・ 朝日新聞における「誤報」	ジャーナリズム
西山哲郎 (2015)	メディア一般 2020年「東京五輪・パラリンピック」	東京五輪・パラリンピックへの視点 ・ 招致活動と震災復興 ・ レガシー ・ 放映権料	ジャーナリズム
中川裕美 (2015)	雑誌 明治前期「女子体育」 雑誌「女学雑誌」	明治時代前期における女子の身体と体育思想 ・ 雑誌「女学雑誌」	ジェンダー
水出幸輝 (2016)	テレビ、新聞、世論調査 2020年「東京五輪・パラリンピック」	2020年東京五輪・パラリンピック開催決定を伝えたテレビ報道と世論調査 ・ NHK、毎日放送、朝日放送、関西テレビ「ニュース・報道」「情報ワイド番組」 ・ 招致委員会、笹川スポーツ財団、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞「世論調査」	オリエンタリズム
田中東子 (2016)	CM 1990年代以降「女性アスリート」	第三波フェミニズム(Third Wave Feminism)とスポーツ文化の関わり、および女性アスリートの表象の意味 ・ CM「ナイキ」「ECG英語学院」など	ジェンダー
岡田桂 (2016)	雑誌 1930-1980年代「ウエイトリフティング・ボディビル」	1930-1960年代において形成される男性の身体的理想、および1960-1980年代において異性愛化されていく過程 ・ 雑誌「Strength and Health Magazine」、「Muscle Builder」、「Muscle and Fitness」、「Physique Pictorial」	ジェンダー
多々良直弘 (2017)	テレビ 2013-2014年「サッカー中継」	日本語および英語での実況解説における実況中継参加者による批判言説の展開 ・ SKY/NHK「チェルシー vs カーディフ」(イングランド・プレミアリーグ) ・ SKY/NHK「マンチェスターU vs マンチェスターU」(イングランド・プレミアリーグ) ・ ITV「イングランド vs ブラジル」(国際親善試合) ・ テレビ朝日「日本 vs オランダ」(国際親善試合) ・ テレビ朝日「日本 vs ベルギー」(国際親善試合) ・ ESPN/フジテレビ「ブラジル vs クロアチア」(2014年ブラジルW杯) ・ ESPN/NHK「日本 vs コロンビア」(2014年ブラジルW杯) ・ ESPN/NHK「ブラジル vs ドイツ」(2014年ブラジルW杯) ・ ESPN/NHK「アルゼンチン vs オランダ」(2014年ブラジルW杯) ・ ESPN/NHK「ドイツ vs アルゼンチン」(2014年ブラジルW杯)	実況
リー・トンブロン (2017)	テレビ、記事 2016年「リオデジャネイロ五輪」	米国におけるリオデジャネイロ五輪報道の内容 ・ NBCへの批判記事など	ジャーナリズム
宮澤武 (2018)	新聞 1946-2016年「スポーツ」	新聞記事における「負け」の語られ方、およびボジティブに語られる「負け」の社会的機能 ・ 読売新聞「負けに関する記事」	ナラティブ ナショナリズム
久保賢志 杉本厚夫 (2018)	新聞 1990-2015年「高校スポーツ」	新聞における「高校スポーツ」に関する言説と語られ方、および社会的認知度 ・ 朝日新聞、毎日新聞「高校スポーツに関する記事」	ナラティブ

対象とされてきた五輪やW杯などといった世界規模の大会はほとんど扱われておらず、また多くの研究では身体性やジェンダーをフレームとして分析が進められていた。

たとえば、内田²⁰⁾と岡田²¹⁾は、いずれも男性性に焦点を当て雑誌の言説分析を行っている。内田は、少年雑誌を対象に、戦中から戦後まで日本人男性におけるマスキュリニティの発展過程について明らかにしており、岡田は、1930年代から1980年代までの米国のフィジカル・カルチャー雑誌を対象に、スポーツと結び付けられて発展してきた理想的な男性性を描き出している。また、小石原²²⁾と中川²³⁾が着目するのは、女性向け雑誌に描かれた女性性である。小石原は、1920年から1930年の少女向け雑誌において表象されるスポーツ少女を対象に、十代の女性のイメージやジェンダー規範が描き出されてきたことを確認しており、中川は、明治期における「女学雑誌」に表れた女性の身体に着目し、体育思想との結びつきについて明らかにしている。一方、阿部²⁴⁾は、雑誌「The Cord」を史的資料として、パラリンピックの前身であるストック・マンデビル競技大会の発展過程を描き出している。いずれも、1900年代初期から中後期、あるいは明治期の雑誌の記事が分析対象とされており、主に歴史社会的な手法を用いた言説の読み解きによって研究が進められている。

ラジオ

対象とされた研究に関して、ラジオの言説を直接分析対象としたものは見当たらなかった。たとえば、山口²⁵⁾の研究は、ラジオから流れる言説を分析しているのではなく、街頭ラジオにおける集団聴取という空間がいかにして形成されていくのかについて、早慶戦や甲子園野球に関する新聞や雑誌記事の分析によって描き出している。また、脇田²⁶⁾は、1924年のシャモニー五輪およびパリ五輪において、ラジオが新たなメディアとして受け入れられていく過程に焦点を当て、史的資料から明らかにしている。さらに山口²⁷⁾は、1932年のロサンゼルス五輪において見られるラジオ放送を聞くオーディエンスの姿を描写する新聞記事に着目し、メディアが創り出す時間的特性とその時間意識を共有する意味について検討している。

メディア一般

黒田²⁸⁾、森田²⁹⁾、西山³⁰⁾は、特定のメディアに限定するのではなく、様々なメディアにおけるスポーツの言説に焦点を当てている。たとえば、黒田は1964年の東京五輪から日韓W杯までのスポーツイベントに着目し、メディアとスポーツの結びつきについて再確認している。また、森田は東日本大震災と結び付けられて語られた様々なスポーツの物語について、批判的に検討を加え、その功罪について指摘する。さらに、西山は、2020年の東京五輪・パラリンピックの報道に関して、招致活動と震災復興、レガシー、また放映権料などの問題を取り上げ、五輪開催への新たな視点について言及している。

その他のメディア

劉³¹⁾は、北京五輪が中国にもたらした影響について、中国の世論形成に関わる著書を具体的な資料として、中国における政治、社会および文化の視点から検討している。一方、田中³²⁾は1990年代の「第三波フェミニズム」を分析視角として、CMにおいて女性アスリートの描かれ方について明らかにしており、また和田³³⁾は、インターネットにおける剣道の中継の配信や視聴、またウェブサイト利用者間の交流などについて、インターネットメディアにおける活用の実態と可能性について提示している。

まとめにかえて

本稿では、Wennerによるメディア・スポーツ研究における発展の区分を参考に、メディア環境が大きく変化した2000年以降のメディア・スポーツ研究について整理してきた。最後にこれまでの内容を踏まえ、今後のメディア・スポーツ研究における課題と若干の展望を述べることで、まとめにかえたい。

これまでのメディア・スポーツ研究は、世界規模の大会が研究対象とされる傾向にあった。特に、2002年の日韓W杯や、2020年に開催予定の東京五輪・パラリンピックへの関心は高く、1964年の東京五輪との比較から検討された研究も散見された。その他にも、パラリンピックの前身とされるストック・マンデビル競技大会、甲子園野球、九州一周駅伝、さらには十二時間の長距離競争などのように、日本国内外の様々な大会が

研究対象とされていた。また、1980年代から1990年代における関連研究と比較してみると、一定数の研究が蓄積されてきた一方で、発表される論文等の増加には、サッカーW杯や五輪などの世界規模のスポーツイベントの開催が影響していたといえる。そのため、今後はイベントの話題性に引き摺られない基礎的な研究の積み重ねが望まれる。報道量の増加によって研究への関心が高まることは想像に易いが、五輪と同時期に開催されているパラリンピックに関する研究については、量的な不足を指摘せざるを得ない。リオデジャネイロ大会²³を例にとれば、五輪では参加国(地域)数207、参加者数11,238名、実施種目数307であったのに対して、パラリンピックでは、参加国(地域)数159、参加者数4,333名、実施種目数528と、五輪と比較しても決して小規模な大会とは言えない。しかしながら、これまで検討してきたように、五輪とパラリンピックに関する研究論文の量的な差は明白であり、報道量の差が少なからず影響していることについても疑いの余地はないだろう。報道量の差によって引き起こされる知名度という格差は、スポーツイベントそのものに対する格差として世間から認識される可能性がある。その上、報道機関からメディアバリューの不足したイベントとして認識されるようになれば、さらなる悪循環を生み出す恐れもある。したがって、メディア・スポーツにおける研究対象の偏りは、スポーツ振興の観点からも重要な課題であるといえる。

また、研究対象とされた媒体別にみても、1990年代以前と比べて大きな変化は生じておらず、現在でも多くの研究では、テレビや新聞が中心であり、インターネットの普及によってオンラインメディアを対象とした研究が増加したわけではない。研究を進めるにあたっては、資料の選定と収集が最も重要な作業といっても過言ではないが、インターネットのように書き込み、編集、削除等が頻繁に生じるメディアから、必要な資料を収集することの困難さが示されているのかもしれない。資料の収集方法に関していえば、新聞や雑誌などについては各大学の図書館や国立国会図書館等で対応可能であるが、インターネットにおける情報の収集方法や分析方法の確立は今後の課題となるだろう。

たとえば、新聞社は、紙面以外においてもインター

ネット上で日々報道を行っているが、読者からそれらの報道に対するコメントが可能であるし、テレビで放送されていた試合の中継に関しても、インターネット上で視聴し、その都度コメントを残すことが可能である。特に、スポーツに関する情報は、たとえ試合が行われていない日であったとしても、毎日何らかの情報が発信され、スポーツと関わる協会や大会のウェブサイトも日々更新されている。こうした意味で、剣道に関するウェブサイトや掲示板の利用状況から、インターネットにおける多様な情報収集のコミュニケーション空間としての機能的側面と剣道界への影響について検討した和田の研究は、新たなメディアとスポーツの関係に着目した研究として興味深い。

ところで、2014年、Routledgeから新たなメディア・スポーツに関するテキストとして *Routledge Handbook of Sports and New Media*³⁶⁾ が出版された。本書のねらいは、スポーツとメディアに関する過去、現在、未来への架け橋と、スポーツメディアがこれまでどのようなものであり、将来どのようなようになるのかに関する概念を提供するものとされている。全5パート30章から構成されている本書は、ウェブサイトやソーシャルメディア、またこうしたメディアを通じて行われるスポーツの消費や、競技者やファンの間にもみられる相互関係などに焦点が当てられている。本稿では研究対象から除外しているが、日本国外の研究に目を向けてみると、新たなメディアであるオンラインメディアにおけるスポーツに着目した研究も徐々に蓄積されている。たとえば、国際五輪委員会が提示したリオデジャネイロ五輪に関する政治的言説について検討した Millington and Darnell³⁴⁾ の研究や、女性スケートボーダーたちを描く主要メディアに抵抗する彼女たちの言説を検討した MacKay and Dallare³⁵⁾ の研究などは、ウェブサイトやブログの記事が主たる分析対象とされている。

これまで、日本におけるメディア・スポーツ研究の多くは、コミュニケーション論やメディア論、あるいは社会学を理論的な拠り所として進められてきた。一方で、スポーツとしての研究発展のためには、既存の方法論や枠組みにとらわれるのではなく、スポーツという現象や身体文化に目を向けながら、新たな方法論を探究する必要もある。こうした意味で、昨今のメデ

ィア環境の変化は、研究史上、大きな転換期になるのではないだろうか。

注

- 1) 山本のレビューによって検討された日本におけるメディア・スポーツに関する研究は、「体育・スポーツ社会学研究」および「スポーツ社会学研究」に掲載された論文のみであった。
- 2) J-Stage にて抽出された査読付き学会誌の論文には、特集記事も含まれている。
- 3) リオデジャネイロ五輪およびリオデジャネイロパラリンピックに関するデータについては、以下のウェブサイトを参考にした。
日本オリンピック委員会ウェブサイト
「大会参加状況（リオデジャネイロ）」
https://www.joc.or.jp/games/olympic/sanka/olympic_s8.html（参照日 2020年2月5日）
日本パラリンピック委員会ウェブサイト
「過去の大会（リオ2016パラリンピック）」
<https://www.jsad.or.jp/paralympic/what/rio2016.html>（参照日 2020年2月5日）

引用文献

- 1) Kinkema, K. M. and Harris, J. C. (1992) Sport and the mass media, *Exercise and Sport Science Reviews* 20: 127-159.
- 2) 山本教人 (2000) 国内外におけるメディア・スポーツ研究の動向と今後の課題. *九州体育・スポーツ学研究*, 14 (1): 1-10.
- 3) Coakley, J. J. (2009) Sport and Media. In: Coakley, J. J. (eds), *Sports in Society: Issues and controversies*, 10th edition, McGraw-Hill, pp. 392-435.
- 4) Wenner, L. A. (2015) Sport and Media. In: Giulianotti, R (eds) *Routledge handbook of the sociology of sport*. Routledge: New York, pp. 377-387.
- 5) ファン・ソンビン (2003) W 杯と日本の自画像, そして韓国という他者. *マス・コミュニケーション研究*, 62: 23-39.
- 6) 山本浩 (2003) ワールドカップ実況放送の現場から. *マス・コミュニケーション研究*, 62: 58-81.
- 7) 田中東子 (2003) ジェンダー化された身体とスポーツ. *マス・コミュニケーション研究*, 62: 40-57.
- 8) 崎田嘉寛 (2015) 東京パラリンピック (1964) に関するテレビ放送—NHKでテレビ放送された映像に着目して—. *スポーツ史研究*, 28: 71-83.
- 9) 水出幸輝 (2016) 2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定と他者—テレビ報道を事例に—. *マス・コミュニケーション研究*, 24 (1): 79-92.
- 10) リー・トンプソン (2017) 史上もっとも成功したメディア・イベント—アメリカにおける2016年リオ五輪のテレビ放送—. *スポーツ社会学研究* 25 (1): 21-33.
- 11) 多々良直弘 (2017) メディア報道における批判のディスコース—スポーツ実況中継において日英語話者はどのように批判を展開するのか—. *社会言語科学*, 20 (1): 71-83.
- 12) 山本教人 (2005) 駅伝を語る: 第51回九州一周駅伝の物語. *体育学研究*, 50 (6): 641-650.
- 13) 西原茂樹 (2013) 甲子園野球の「物語」の生成とその背景—明治末期～昭和初期の「青年らしさ」「純真」の言説に注目して—. *スポーツ社会学研究*, 21 (1): 69-84.
- 14) 松浪稔 (2007) 日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究: 1901 (明治34)年 時事新報社主催「十二時間の長距離競走」に着目して. *スポーツ史研究*, 20: 51-65.
- 15) 浜田幸絵 (2011) 1932年ロサンゼルス・オリンピックのメディア表象. *マス・コミュニケーション研究*, 79: 111-131.
- 16) 山田健太 (2015) 東日本大震災・オリンピック・メディア: 国益と言論. *マス・コミュニケーション研究*, 86: 39-62.
- 17) 宮澤武 (2018) スポーツにおける「負け」の語られ方. *スポーツ社会学研究*, 26 (1): 59-74.
- 18) 久保賢志・杉本厚夫 (2018) 高校スポーツにおける教育とビジネスの葛藤—新聞記事の内容分析から—. *スポーツ社会学研究*, 28 (2): 177-187.
- 19) 森津千尋 (2011) 植民地下朝鮮におけるスポーツとメディア—『京城日報』の言説分析を中心に—. *スポーツ社会学研究*, 19 (1): 89-100.

- 20) 内田雅克 (2012) 少年雑誌が見せた「軍人的男性性」の復活. ジェンダー史学, 8: 75-84.
- 21) 岡田桂 (2016) セクシュアリティ化される男性性の理想: 1930—80年代の米国フィジカル・カルチャー雑誌における男性身体表象とホモソーシャル連続体. 体育学研究, 61 (1): 197-216.
- 22) 小石原美保 (2014) 1920-30年代の少女向け雑誌における「スポーツ少女」の表象とジェンダー規範. スポーツとジェンダー研究, 12: 4-18.
- 23) 中川裕美 (2015) 『女学雑誌』の記事に見る女子体育思想の変遷. 出版研究, 46: 63-83.
- 24) 阿部崇 (2007) 雑誌「The Cord」に見るグットマンの導入したスポーツの変容: アーチェリーに焦点を当てて. 障害者スポーツ科学, 5 (1): 32-40.
- 25) 山口誠 (2003) 「聴く習慣」、その条件: 街頭ラジオとオーディエンスのふるまい. マス・コミュニケーション研究, 63: 144-161.
- 26) 脇田泰子 (2015) オリンピック放送の原点〜ラジオと1924年オリンピックの時代〜. スポーツ史, 28: 1-19.
- 27) 山口誠 (2008) メディアが創る時間: 新聞と放送の参照関係と時間意識に関するメディア史的考察. マス・コミュニケーション研究, 73: 2-20.
- 28) 黒田勇 (2003) メディア・スポーツの変容: 「平和の祭典」からポストモダンの「メディア・イベント」へ. マス・コミュニケーション研究, 62: 5-22.
- 29) 森田浩之 (2012) 3.11 とメディアスポーツ—物語の過剰をめぐって—. スポーツ社会学研究, 20 (1): 37-48.
- 30) 西山哲郎 (2015) 範例的メディアイベントとしての2020東京オリンピック・パラリンピック大会の行方について. マス・コミュニケーション研究, 86: 3-17.
- 31) 劉傑 (2009) 中国の再出発をもたらす北京オリンピック. スポーツ社会学研究, 17 (2): 3-14.
- 32) 田中東子 (2016) スポーツする少女たちの身体とそのゆくえを「第三波フェミニズム」の立場から考える. スポーツ社会学研究, 24 (1): 51-61.
- 33) 和田崇 (2015) インターネットによる剣道の視聴・コミュニケーション空間の変化. 地理科学, 70 (4): 197-214.
- 34) MacKay, S. and Dallaire, C. (2012) Skirtboarder net-a-narratives: Young women creating their own skateboarding (re)presentations, *International Review for the Sociology of Sport* 48 (2): 171-195.
- 35) Millington, R. and Darnell, C. S. (2012) Constructing and contesting the Olympics online: The internet, Rio 2016 and the politics of Brazilian development, *International Review for the Sociology of Sport* 49 (2): 190-210.
- 36) Billings, C. A. and Hardin, M. (eds) (2014) *Routledge Handbook of Sports and New Media*, Routledge: New York.